

発行所〓社会通信社 発行人〓滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsuushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsuushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299―5367

郵便振替 〓 〇〇―〇〇―九―五八四三一 労金〓中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

〈特集〉小林晃氏を悼む

■巻頭言■

小林晃さんを送る

原 野 人 …… 2

現代も資本主義である、ことを忘れない

小林 晃

(1)人工知能の資本主義的利用の帰結

…………… 3

(2)「保護貿易」か「自由貿易」か

…………… 4

(3)「資本主義の未来」

…………… 6

(4)現代資本主義論の混迷

…………… 8

(5)AI（人工知能）と

BI（ベーシックインカム）

…………… 11

小林晃先生の本誌掲載論文

…………… 13

編集部より

…………… 13

刊旬社社会通信

NO.1267 二〇一八年七月一日号

二〇一八年七月一日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

小林 晃 さんを送る

6月8日、突然の報せだった。まだまだ活躍していただけるものと思っていた。向坂先生の愛弟子がまた一人消えた。この混乱する時代に明確な理論を教えてくれる師であり先輩であった。社会主義者が社会民主主義者になるのを嘆いて、「社会主義協会」を離れたのは何年前のことだったろうか。

多くの社会主義者は、ソ連等が変質し崩壊した原因をきちんと総括することができずに混乱し、マルクシズムから逃避したり、マルクスや向坂を修正・歪曲していった。小林さんは、どこまでもマルクスやエンゲルスやレーニンや向坂逸郎の思想と科学的な理論に忠実だった。3年ほど前には「現代と『資本論』」（新潮社）を出された。そこでは、『資本論』をどう読むかも、マルクスや向坂にそって明解である。

「もし事物の現象形態と本質とが直接に一致するならば、一切の科学は不要であろう」（『資本論』岩波文庫版⑨、12頁）というマルクスの至言にそって、事の本質を正しく理解するためには「科学」が必要であり、本物の学習とその継続が必要であることを説く。科学抜きには、地動説より天動説が正しく見える。労働力と労働の関係もわからず、搾取も消えてしまう。

今日の独占資本による搾取は、もとはどこから生まれ、どのような構図でなされているのかも、科学的に分かりやすい。①本源的搾取、②流通過程での追加的・副次的搾取、③国家権力を介した追加的・副次的搾取、④グローバル化による国際的搾取、と整理される。

現代資本主義とは何か―独占資本と国家独占資本主義―についても、平易に説明される。ケインズ主義、新自由主義などの経緯とその破綻についても、あらためて明らかにされ、それ以降の行方についても検討されている。

2008年の世界同時恐慌も説明され、現代の恐慌（不況）がどのような周期的業病であるかも明らかにされる。市場経済、混合経済、俗流経済学、アベノミクスなどについても、根本から批判されている。

ソ連・東欧問題をどう見るか―「崩壊」前夜―をめぐっても、基本的な諸問題が、分かりやすく追究されている。

2015年10月に頂いたはがきには、こう書かれていた。

「御多忙中、拙著の中身を、大変に手際よく紹介、宣伝して頂き――貴重な『巻頭言』（本誌10月15日号）まで潰して――恐縮です。」

これからの運動を担う若い方々が労農派マルス主義に理論的確信をもって頂く切っ掛けとなればと、念じています。」

最後のお便りとなった今年の年賀状には「小生、昨夏以降、体調を崩し、当面その回復に、専念中です。」とあった。気になりながらお見舞いもできなかったことが心残りである。今は向坂先生と歓談されていることであろう。（6月15日 原 野人）

現代も資本主義である、ことを忘れまい(1)

― 人工知能の資本主義的利用の帰結 ―

今日、勤労国民の物の見方・考え方に、絶大な影響力を及ぼしているブルジョア・マスメディアによる報道・記事等に共通する最大の基本的特徴は、現代も資本主義である(厳密にいえば、国家独占資本主義：拙著『現代と「資本論」』 時潮社、参照)ことを、まったく無視(ないし無知)していることである。これによって、勤労国民にとって、「諸悪の根源」が、経済的にも政治的にも社会的にも、基本的にすべて、一握りの独占資本による搾取と反動政治の追求・推進に、根ざしていることを見え難くしている。一言でいえば、独占資本による思想攻撃である。戦後最悪の安倍政権が、比較的高い支持率を維持し続けているのも、ここにその大きな一因があるといつてよい。

「朝日・地球会議二〇一六―AI(人工知能)とともに生きる」と題して、一連のパネル討論や講演の特集記事(「朝日新聞」、一〇・二六、一一・九)が組まれている。

「急速に進化するAIは、人間から雇用を奪うのか。そんな問いから議論は始まった」

「日本の労働人口の49%が、将来はAIやロボットに置き換えられる可能性が高い」

「労働力が不足する農業や介護の分野で、肉体労働を代替できると期待できる」

「人工知能をコスト削減の道具として見るだけでは、企業の成長はない」

「AIに仕事を奪われないためには、代替が難しい『創造性や社会的知性』を子どもたちに身につけさせることが急務」

「AIと人間がどう協調していくか。ここで成功することが日本にとって重要だ」

「AIの技術は進んでいるのに、それに対する人間の考えが追いついていない。それが今の状況です」

「AIの活用で効率上がる。ただ、それが人間にとって幸せかどうかは別問題です。人間が幸せになるよう、人間優先でAIをうまく使いこなす必要があります。その理念が、議論の出発点になる」云々。

ここに示されているのも、現代日本は資本主義である、ことをまったく無視した、最先端の機械をめぐる「謎」論の羅列である。対するに、マルクスの科学的機械論は、「機械装置そのもの」と、その「資本主義的使用」を峻別して、論旨明快である。

「生活手段からの労働者の『遊離』(「機械装置によって駆逐された労働者」)にたいして、機械装置そのものには責任はない……機械装置の資本主義的使用と不可分な矛盾や敵対関係は、存在しない、それらは機械装置そのものからではなく、その資本主義的使用から生ずるのだから! したがって、それ自体として見られた機械装置は、労働時間を短縮するが、資本主義的に使用されれば、労働日を延長し、それ自体としては労働を軽減するが、資本主義的に使用されれば、労働の強度を高め、それ自体としては自然力にたいする人間の勝利であるが、資本主義的に使用されれば、自然力によって人間を屈服し、それ自体としては生産者の富を増すが、資本主義的に使用され

れば生産者を貧民化する」(『資本論』第二分冊、四三六〜四三八)。

「機械装置そのもの」は、本来、人間と社会にとつて、有害ではなく、逆に有益である。マルクスが言うとおり、たとえば、機械は、個別的にも全社会的にも、必要な労働時間を短縮し(余暇の拡大)、労働を軽減し、生産される富を増大する、等々。そして、この本来の有益な性質が、基本的にそのまま実現される仕組みの社会が、社会主義である。機械装置の「社会主義的使用」である。ここでは、機械が、資本による搾取の物的手段であることを止めるからである。

しかし、「機械装置」が、「資本主義的に使用されれば」——資本主義のもとでは、これ以外の使用の仕方は、原則としてありえない——、すなわち、独占資本による利潤追求、したがって搾取強化の物的手段として使用されるため、首切り、雇用削減、失業、労働強化、労働日の延長など、総じて勤労国民の「窮乏化」をいっそう強める。今日、日本で、そして世界で進行している「窮乏化」の現状は、『資本論』が、一五〇年前に科学的に論証し、予言した機械論の正しさを、ますます実証している。

【『社会通信』No.1230(2016年12月15日号)】

「保護貿易」か「自由貿易」か

—現代も資本主義である、ことを忘れない(2)—

「米国第一」主義を前面に掲げたトランプが、アメリカ新大統領に就任した。ブルジョア・マスメディアの大方は、このスローガンが、お気に召さないようにみえる。

だが、「米国第一」主義は、ある意味では、国家独占資本主義としての現代資本主義(現代帝国主義)の諸列強、そこにおける各国独占資本とその国家に共通する階級の本音を、露骨に粗々しく表明したまでに過ぎない、と言うこともできるであろう。

どの国の独占資本とその国家も、「国益」と称しつつ、実際には、自国の独占資本の利潤と権益を、第一義に、最優先して、確保、拡大しようとする点で、何ら変りないからである。T P Pという多国間協定の形をとろうと、そこを離脱して、「米国第一」の二国間協定という形をとろうと、その階級の内実と意図に変わりはない。いずれにせよ、いかにして自国独占資本の独占利潤(搾取)とそのための内外市場を、最大限に確保・拡大するか、という点ではまったく同じである。

また、マスメディアは、「米国第一」主義を、「保護貿易」(輸入規制、関税強化など)＝悪、対するにT P Pなど、「自由貿易」＝善と見做すのが、お好みのようにみえる。

たとえば、こう述べている。

「トランプ氏の孤立主義、保護(貿易)主義は、第2次大戦前の米国や世界の暗黒時代を思い起こさせる。戦後の米国外交は、大戦前の反省にたち、国際主義が基軸だった。今、米国は戦後最大の転換点にさしかかっているのかもしれない。

識者の中には、トランプ氏が任命した閣僚が保護主義・孤立主義ばかりではないことや、米議会には共和党を中心に自由貿易派も多いことから『戦前のような極端な保護主義には戻らない』との楽観論も少なくはない。」(アメリカ総局長「孤立主義の歴

史くり返すのか、『朝日』一・一二。

かつて、マルクス、エンゲルスは、「自由貿易」に原則的 supports の態度を表明したことがある。その根拠の第一は、資本主義の生成・発展期において、いまだに多かれ少なかれ残存する、とつくに桎梏（しっこく、手かせ足かせ）と化した封建的生産関係・遺制からの生産力の完全な解放ということ。第二に、それによる労資間の階級闘争の諸条件の成熟ということである。この意味で、そして、この限りで、当時の「自由貿易」は、一定の歴史的進歩性をもっていたからである。

だが、現今の「自由貿易」には、こうした歴史的進歩性はひとかけらもない。現今の「自由貿易」は、総体として基本的に――個別の具体的事例としては、例外的なものもありうる――一握りの独占資本の利潤と権益を、最大限に確保しようとするものであり、そしてこれによって、とつくに生産力発展の桎梏と化した資本主義という生産関係を、あくまで維持・延命しようとするものだからである。この意味で、「保護貿易」だけでなく、「自由貿易」も、独占資本とその国家による反動的政策の「二つの異なった表現」にすぎない。

以下の引用は、マルクス・エンゲルスの貿易論の紹介の結びとして筆者が、四〇年ほど前に書いた文章の一節である。年数は経っているが、背景としての資本主義の歴史的発展段階――国家独占資本主義としての現代資本主義（現代帝国主義）としては、四〇年前の当時も今も、基本的に変わらないから、「自由貿易」、「保護貿易」をめぐる基本視点は、ほぼそのまま当てはまる、といつてよいであろう。

「以上あきらかなように、マルクス・エンゲルスは、自由貿易が『できるかぎり自由かつ急速な生産力の発展拡大』、それにともなう労資の階級分化・対立の発展を促進し、こうして階級闘争と社会主義移行の一般的諸条件のより急速な成熟を促す『経済的媒体』であるという『理由のために、そしてただこの理由からのみ』、自由貿易を『究極的にかつ原則的に』支持したということである。ただこの場合、問題の背景をなす歴史的時期は、資本主義が、独占資本主義段階におけるようにつとに生産力発展の桎梏をなすにいたった時期ではなく、反対に、資本主義が生産力発展に照応しえた時期であり、しかも生産力の発展の封建的桎梏と封建的残滓を多かれ少なかれなおとどめていた時期であったこと、を歴史的に正しく考慮に入れるべきことはいふまでもない。

つまり、当時の自由貿易か保護貿易かという問題は、今日いわれる貿易の「自由化」や国内産業保護を口実とする関税（カルテル関税）とは、その歴史的内容がまったく異なっており、後者の場合はいずれも、独占資本の反動的政策の二つの異なった表現にすぎない。したがって今日では、われわれがそのいずれかを『究極的にかつ原則的に』選択し支持するなどということは原則としてありえない」（拙著『マルクス財政論』、新評論、一九八〇年、一五四頁）。

「資本主義の未来」

― 現代も資本主義である、ことを忘れない(3) ―

本稿の表題「資本主義の未来」は、本年初の社説（「朝日新聞」、一月三日号）からの借用である。今年一年間の報道・記事の拠（よりどころ）となる現代（資本主義）観と編集基調を示したものとということができであろう。今回は、主として、これが「まな板の鯉」である。

現代資本主義の現代性の決定的指標は、一握りの独占資本（大企業）の成立と支配である。そして、その国家権力との融合・癒着である。現代資本主義を、科学的用語で国家独占資本主義（現代帝国主義）と呼ぶ所以（ゆえん）である。（詳しくは、拙著『現代と「資本論」』、新潮社、二〇一五年、参照）

財務省・法人企業統計（二〇一一年度）によると、全体の〇・二％にすぎない資本金一〇億円以上の大企業五二四社が、総資産の約半分、四九・五％を保有し、また付加価値額においても、五二・三％と大半を占めている（『日本経済図説』、岩波新書、二〇一三年第四版、八〇頁）。言い換えれば、社会主義―主要な社会的生産手段の社会主義的国有・公営化―の経済的・物質的な前提条件は、すでに十分に成熟している、と言い換えてもよい。残る問題は、主体的条件のみである。

また、国民を階級構成でみると、労働力人口（二五く六五歳六五八七万人のうち「労働者階級は八五％、農漁民三％、自営業者八・四％、家族従事者二・五％となる。労働者階級が絶対的多数者、『大階級』であるのは明らかだ。厚労省のこの統計（『一五年版 労働力調査年報』）は失業者を労働力として数えていない。なぜか。剰余価値を生まぬ者は、ブルジョア社会にあつてはゴミとしてあつかうのである。

資本家階級はいかほどあるか。『役員四季報』（東京経済新報社）によれば上場企業約三千社の『重役』は約四万人とある。資本家階級は価値増殖を絶対的使命とする資本の人格化、現在では独占資本として君臨する株式会社（『経営者』）としてある。資本家階級、とりわけ独占資本家階級は労働力人口六五八七万人のうち、たった四万人、率にすれば〇・〇六％にすぎない。」（滝野忠「労働組合強化への基本視点」、本誌、一一九七号、二頁）。

この一握りの独占資本が、「企業献金」「パーティー券購入」等を通じて、政権与党・高級官僚と融合・癒着し、「金権政治」を繰り広げている―正に国家独占資本主義である。これを近似的に表現する用語として、かつてマスメディアでも、「政官財複合（癒着）」という用語が、しばしば用いられたこともあったが、今日では、これすら死語化している。

前掲・社説は、「資本主義の未来」について、こう述べている。

「冷戦終結後、あくなき利潤の追求を推進力に、ヒト・モノ・カネの国境を越える往来を広げてきた資本主義。問われているのは、その未来の姿である」。

「資本主義はこれまでも挫折を経験し、曲折を重ねてきた。ただ、前世紀の経験は、ソ連などでの社会主義の失敗も白日の下にさらした。

たとえばブレイキの利きが悪い中古車であっても、当面は資本主義を使い続けるしかない。だとすれば、少しでも良くするために何をなすべきか。

「貿易の拡大や技術の進歩に伴って生じる格差は、再分配による修正を徹底すべきだ。それは税制の活用など、一義的には国ごとに課された仕事である。国際的な課題にも、市場任せでは解決できないものがある」。

「だがその際、資本主義の『影』も、繰り返し表れるはずだ。大企業による独占など『市場の失敗』への対処、バブルに翻弄される景気の安定化、成功者への富の集中の抑制」。政府の役割は引き続き重要だ。

「より良いシステムを探る地道な努力が、今こそ必要だ」。

(一) 社説「資本主義の未来」は、その性格上、当然のこととはいえ、「資本主義の『未来』は、社会主義への移行にあり」とは、もちろん言わない。むしろ逆に、「ソ連などでの社会主義の失敗も白日の下にさらした」として、事実上、問題外視する。

(二) 日本ほか主要諸国の現代の支配的体制を、一応、「資本主義」と括らえている。だが、用語として「資本主義」は存在するが、実際には、「資本主義」とは名ばかりで、中味は無いに等しい。というのは、肝心の資本による搾取、とりわけ現代では、一握りの独占資本による搾取・収奪というキー・ポイントが、まったく欠落しているからである。これでは、所得・資産の格差と貧困の拡大・蔓延をいくら強調しても、その真因は明らかとならないことは言うまでもない。「資本主義の『影』」「市場の失敗」等々、曖昧模糊とした言い回しで、事実上、お茶を濁している。また、「グローバル経済」や「多国籍企業」はあっても、肝心の独占資本はない。

(三) 「ブレイキの利きが悪い中古車であっても、当面は資本主義を使い続けるしかない」が、国内的にも国際的にも、「市場任せでは解決できない」諸課題がある。この解決のためには「政府の役割が引き続き重要」であるという。一言でいえば、政策とりわけ経済政策である。

周知のとおり、これまで国家独占資本主義に対応した代表的な経済政策基調として、ケインズ主義と新自由主義があった。だが、今日では、いずれも破綻を来し、また、これに代わる「第三の道」もいまだ見出せず、政策基調不在のまま、混沌とした状況下でさ迷っている。その結果、ケインズ主義と新自由主義の、いわば場当たりの併用で、その場を凌いでいるのが現状と言つてよい。

だが、こうした中で、勤労国民の窮状をよそに、独占資本（企業・個人）のみは、全体として肥え太り続けている。国家独占資本主義下の経済政策とは、いずれにせよ、独占資本奉仕を、その階級の本質とするからである。「一七年版・世界長者番付」（米経済誌フォーブス、三月二〇日発表）によると、保有資産（剰余価値の塊）八六〇億ドル（約九兆七千億円）を筆頭に、一〇億ドル超の「ビリオネア」が前年より二二三三人増の二〇四三人、番付入り総資産が、同一八％増の七兆六七〇億ドル（約八六六兆円）。同様に日本でも（日銀・三月一七日発表）、家計の金融資産（預金、株式、投信など）が、昨年一二月末時点で、前年同月比〇・九％増の一八〇〇兆円に達して、過去最高となっている（増えたのは主に高額資産家）、等々。

ある良心的な経済学者の「嘆き節」は、こうした現状を素直に吐露していると言つてよいかもしれない。

「経済学は一体何のためにあるのか、つくづく考えさせられる。近年、主要国では何とかインフレにしたいと、様々な経済理論が利用されてきた。それはインフレ率を高めるための経済理論であつて、必ずしも人々の幸せにはつながらない。特に金融政策では『ヘリコプターマネー』が、また財政政策では『物価水準の財政理論』が注目されているが、人々の幸せには程遠い理論と言わざるを得ない。長年物価が下げ気味で『デフレ』と診断された日本では、国民の幸せはそつちのけで、あたかもインフレにすることが是であるかのように、物価を上げるリフレ策が重視された。

経済学は人々を豊かにし、幸せにする学問でなかったのか。」（「経済気象台」、
「朝日」、二〇一七年三月一五日）。

【『社会通信』No.1239（2017年5月1日号）】

現代資本主義論の混迷

—現代も資本主義である、ことを忘れまい(4)—

すでに御覧になった読者もあるうが、週刊「エコノミスト」（毎日新聞出版）の五月二・九合併号で、「新しい資本主義入門」という特集を組んでいる。一言でいえば、ブルジョア的（ないし小ブルジョア的）現代資本主義論（観）の特集である。現代資本主義（国家独占資本主義）の内外にわたる近年の混迷ぶりを反映して、論（観）の方もまた、混迷極まる感が強い。

特集は、そのリード（前書）で、

「日本を含む世界の先進国が、低インフレや格差の拡大、低成長など、根本的な問題に苦しんでいる。資本主義は限界か、失敗か、代替はあるのか。古くて新しいこの疑問の答えを探った。」と述べている。

以下は、その特集による「答え」——全体の総論に当たる「特別対談」の紹介（抜粋引用）である。「各論」は省略。

「——そもそも資本主義とは何か。

吉川 市場をベースにした自由主義経済、そういうものを我々は資本主義と呼んでいる。

もつとも、経済学者のサミュエルソンは『混合経済』という言い方をした。つまり、完全に自由放任の市場経済、いわゆる『小さな政府』『夜警国家』のようなものは19世紀に終わっており、資本主義経済は、国が大きな役割を果たしている。19世紀とは姿が変わったとはいえ、資本主義は終焉していない。」。

「——資本主義は今、何が問われているか。

吉川 資本主義はこれまで何度か「ダメ出し」を食らってきた。『資本主義が限界にきている』とか『資本主義が終焉しつつある』という議論は、今回が初めてではない。

萱野 とりわけ、第二次世界大戦以降は、国家のマクロ政策が定着し、資本主義の行

き詰まりを打破してきた。もちろん資本主義は既存資本の価値低下という『危機』を常に内在させているが、それは歴史的に繰り返され、克服されてきた『危機』なのであり、現在問われている資本主義の『危機』や『限界』も決して新しい現象ではない。』

萱野 マルクス主義者はしばしば窮乏化論を展開するが、人々が資本主義によって窮乏化したのなら、平均寿命は逆に短くなっているはずだ。

吉川 私も全く同感で、今、資本主義に対する『ダメ出し』というのは筋が違っている。閉塞感があるということ、だからシステムとしての資本主義がダメとは思わない。』

「——デフレや低インフレが、資本主義の限界の証左という見方もある。

萱野 デフレの背景にはさまざまな要因がある。過剰生産による在庫の拡大もあれば、新興国の生産力向上による価格競争の激化もあるだろうし、人口の減少もあるだろう。複合的な要因がからむ現象なので、解決は容易ではない。』

「——そのなかで国家はどうあるべきか。

吉川 社会保障の役割を考えても、資本主義経済は野放図に放っておいていいということとはあり得ない。国が役割を果たす。ただし、どういう形でどこまでというのは、正解があるわけではない。資本主義の中で試行錯誤していくしかない。

萱野 社会保障も資本主義経済から見れば、人々の購買力を向上させて総需要を拡大するという、国家のマクロ政策の一つと考えられる。

この点で言えば、資本主義を単なる市場経済と同一視する認識は改めなくてはならない。国家は、『税』という市場経済とは異なる仕方では富を集められる唯一の存在だ。その存在を通じてマクロ政策がなされるからこそ、資本主義は市場経済だけでは克服できない危機をこれまで乗り越えてきた。』

萱野 20世紀の社会主義革命は資本主義へのオルタナティブとして実現されたが、それが現実に行ったのは、資本主義の成立によって分離した政治と経済を、また一緒にしようということ。つまり、権力によって経済をコントロールしようとするからだ。それがどのような帰結を導くのかを我々は十分見てきた。

だから、資本主義を否定したり、資本主義の『終焉』を唱えたりする人は、資本主義以外の方法で政治と経済を分離する方法を示さなくては、知的には無責任と言わざるを得ない。それが示せないなら、社会主義と同じように権力による経済への介入を招くだけだ。』

中身をいちいち問題にしていたのでは、切りがないので、基本的な問題点に限って、ごく簡単に取り上げておこう。現代も資本主義であることを忘れてはならないが、その際、いかなる意味で資本主義か、あるいは現代資本主義か、その理論的キー・ポイントを正しく踏まえたいという話であることは言うまでもない。ところが、特集は、それを、ことごとく欠いた中で、あれこれと議論され、構想されていると言うほかない。もつとも、それを、この特集に求めるのは、『無い物ねだり』に等しいのだが。

第一に、資本主義による搾取、とりわけ現代では、独占資本による搾取・収奪——現代的『諸悪の根源』——の視点が欠落していることである。これでは、現象次元で貧困

や格差を、いくら強調してみても、その解消の方途を正しく提示しえないことは言うまでもない。

第二に、さらに遡（さかのぼ）っていえば、資本主義の基本的矛盾——生産・生産力の社会的性格（あらゆる生産物が、勤労国民の社会的協働の産物となっている）と取得・所有の私的・資本主義的性格との矛盾という視点の欠落である。一方における社会的性格と他方における私的性格——古代中国の故事にいう矛と盾の関係である。現代資本主義のもとで、種々な姿をとって噴き出している諸矛盾も、結局は、ここに源流がある。社会主義とは、主要生産手段の社会化（国有化ほか）によって、この矛盾を発展的に解消する——生産の社会的性格に所有関係を照応させることを意味する。

なお、ついでに触れておけば、「宇野理論」では、この基本的矛盾を「労働力の商品化」とする特異な見解をとっている。この点については、本誌No.四二〜四九号の拙稿（後に『現代資本主義と労働者』、十月社、所収）参照。

第三に、現代資本主義の現代性を特徴づける決定的指標は、一握りの独占資本の成立と支配であり、その国家権力との融合・癒着である。だが、特集には、マクロ（巨視的）、ミクロ（微視的）の視点はあっても、この決定的視点が欠落している。

「経済的に基本的なのは、資本主義的自由競争に資本主義的独占がとってかわったことである。」

「民主主義から政治的反動への転換が、新しい経済のうえに、独占資本主義のうえにたつ政治的上部構造である。自由競争には民主主義が照応する。独占には政治的反動が照応する」（レーニン全集、第二巻三〇六、一三巻三八頁）。

第四に、反独占・社会主義の階級闘争が、勤労国民の現状の改善と歴史の真の前進を推進する機関車である、という視点は欠片（かけら）もない、ことは敢えて言うまでもない。それどころか、社会主義を「権力による経済への介入」と裁断して、現代資本主義の「オルタナティブ（代替）」から、事実上、除外している。

『社会通信』No.1243（2017年7月1日号）

AI（人工知能）とBI（ベーシックインカム）

——現代も資本主義である、ことを忘れない(5)——

前回の（四）（本誌、1243号）で、「エコノミスト」誌による現代資本主義論の特集——そのブルジョア性（ないし小ブルジョア性）を、簡単に紹介、批判しておいた。そこでは、全体の総論にあたる「特別対談」のみを取り上げたが、今回は、いくつかある各論の中で、「AIがもたらす大失業時代——ベーシックインカム導入で理想郷に」というタイトルの論文である。（なお、BI・ベーシックインカムについては、すでに本誌の第1237〜1244号で、原野人氏による的確な批判がなされているので、参照されたい）。

のつけから、趣味の話を始めて恐縮であるが、最近の棋界（囲碁・将棋）には、現代資本主義に劣らず、かつてない「激震」が、集中的に相次いでいる。囲碁の自称・アマ二段の筆者は、とつくに傘寿を過ぎて（病気の後遺症もあって）、気力・体

力とともに、棋力も“がた落ち”している。だが、興味と関心の方は、相変わりない。

“激震”の一つは、将棋の中学生・プロ棋士が、三〇年ぶりに、公式戦連勝の新記録を打ち立てたことであるが、これより、はるかに衝撃的なのが、囲碁・将棋AIに、日本ならびに世界のトップ・プロが、相次いで完敗したことである。すべてが、AI絡みの“激震”である。

将棋の佐藤名人が、AI「PONANZA」に二戦二連敗（五月二〇日）、囲碁の前名人（六冠）井山が、AI「DeepZenGO」に完敗（五月二三日）、世界最強棋士の中国、柯潔九段が、AI「アルファ碁」に三戦三連敗（五月二三～二七日）。「囲碁は人類の知恵の聖地。機械に譲り渡すわけにはいかない」と対局前、豪語していた柯も、完敗後は、「相手は完璧で、勝てる見込みを一切抱かせなかった。力の差がありすぎる」（「朝日」、六月一日号）と語っている。

だが問題は、これから先である。AIの開発者たちは、これで所期の目的は達成したとして、今後は、実社会への応用に集中するという。「朝日新聞」の担当記者も、こう述べている。

「2045年、人工知能（AI）が人類の知性を超え、人の営みを根本から変える人類史の転換点『シンギュラリティ』（特異日、年）が訪れる。AIの世界的権威レイ・カーツワイル氏が自著で提唱したのは12年前だ。当初あまり支持を得られなかったこの論考は、近年にわかに注目を浴びている。先日、私が担当する囲碁界でも、まさにその兆しが垣間見えた」

「初手から終局まで、考えられる局面が天文学的な数となり、着手の価値のプログラミングも不可能とされた最強のボードゲームを、アルファ碁は開発から3年で制覇してしまった。囲碁の歴史は3千～4千年といわれる。この間、営々と技芸を磨いてきた人間を瞬時に追い抜き、もはや背中さえ見えない感がある。いよいよ実社会への参入を強めていく。すでに医療の画像診断や省エネなど、AIは多方面で実用の域に入りつつある。」（「朝日」、六月二三日号）。

実社会において、AIとAIロボットが、急速かつ広範に普及することになれば、失業の加速化と広範化は必至となる。資本主義のもとでは、『資本論』が明らかにしているとおり（本誌、1230号の拙稿、参照）、機械・機器の「資本主義的使用」以外の使用の仕方は、基本的にありえないからである。

本稿で、批判的紹介の対象として取り上げたのは、「エコノミスト」誌による特集「現代資本主義論」の中の各論の一つ、「AIがもたらす大失業時代——ベーシックインカム導入で理想郷に」というタイトルの論文である。〔総論〕批判については、No.1243号の拙稿（四）参照。問題意識の入口は、ほぼ同じでも、結論は大違いである。論文は、タイトルが示すとおり、BIを導入すれば——「中立的・第三者」としての現代国家が導入、実現（?!）——「大失業時代」になっても、「理想郷（ユートピア）」が訪れる、言いかえれば、失業に苦しむどころか、“働かずして食える（生活できる）”（?!）資本主義、「遊んで暮らせる『ユートピア』」（?!）が実現す

る、という。

「人工知能（ＡＩ）やロボットが、人間に代わって多くの仕事をこなす世界が近づきつつある。その時、人間の仕事はロボットに奪われる可能性が高い。」

「その場合、現在の資本主義経済の形も大きく変わることになるだろう」。

「ただ、そうなるには、機械に仕事を奪われた労働者が、別の手段で収入を得て消費する必要がある。収入の道を断たれた労働者は商品を買うことができず、窮乏化は避けられない。何の社会保障制度もなければ、労働者は労働から解放されると同時に、飢えて死ぬしなくなる。」。

「職を奪われた労働者が消費するだけの収入を、労働以外の手立てで得られるようにする必要がある。そうした手立ての一つとして『ベーシックインカム』（ＢＩ）が考えられる。」

ＢＩとは、生活に最低限必要とされるお金を国民全員に給付する制度である。収入の水準によらず、老若男女を問わず個人単位で無条件に支給される」

「ＡＩが高度に発達した未来であっても、ＢＩが導入されることで、人々はそれを糧に暮らしていくことができるようになる。ＢＩの財源は、資本家からの所得税のほか、消費税、相続税、法人税のいずれでも構わない」。

「資本主義は、半ば廃棄されるとともになおも持続する。労働が必要なくなり、搾取もなくなった新たな段階へ進むだろう。」

その時、ＢＩは人々が遊んで暮らせる『ユートピア』（理想郷）をもたらす可能性がある。逆に、そうした分配システムをつくらず、汎用ＡＩが生み出した果実を資本家が総取りする未来は、地球上に資本家と機械しか存在しない『ディストピア』（暗黒郷）をもたらすだろう」。

みられるとおり、たんなる言葉（用語）としては、資本主義、資本家、労働者、搾取、租税、国家、等々、一通り使われているが、肝心の中身において、科学的な理論的規定が、ことごとく欠けている、あるいは踏まえられていない。

ＡＩ・ロボットを論じて、その「資本主義的な使用」か否か、という問題意識はまったくない。労資関係を論じて、搾取・被搾取の視点はなく、あるのは、雇用者・被雇用者、使用者・従業員の視点のみ。また国家についても、階級的視点はなく、事実上、「中立的・第三者」という暗黙の前提で立論、等々。

したがって、まとめて言い換えれば、論者が対象としている「資本主義」は、実際には、実在しない資本主義（せいぜい現象次元においてのみ、存在しているように見えるだけ）であり、いわば架空の資本主義である。したがって、ここに導入されるＢＩも、そして、「ＢＩ・ユートピア」も、「理想郷」というよりも、ギリシャ語・ユートピア（トーマス・モア『ユートピア』の本義どおり、「どこにもないところ（場所・国）」、すなわち、どこにも実現・実在しない架空社会・夢物語というべきであろう。さもなくば、実現・実在するとすれば、現行社会保障制度の全面的な総改悪を「実現」した資本主義——現実の現代国家は、総独占資本であるから——、その公算大というべきであろう。

【社会通信】No.1243（2017年8月15日号）

◇編集部だより◇

小林晃氏（経済学者）は徹底したマルクス主義者であった。『特集 現代も資本主義社会である、ことを忘れまい』に明らかだ。

今年はマルクス生誕200年、昨年は主著『資本論』発刊150年であり、来年は『経済学批判』発刊160年である。マルクスそして『資本論』についての論説、言論、評論はあふれかえっている。最近の刊行物に『マルクス 資本論の哲学』（熊野純彦著、岩波書店 2018年1月）がある。この著のミソは「経済学」といわないで「哲学」と題されていることだ。熊野は宇野さんの信奉者でいらっしやるように「資本論研究の流れによせて」（あとがき）に岩波新書の著作で宇野弘藏を一番におき柄谷行人、内田義彦、大塚久雄、佐藤金三郎、梅本克己、廣松渉をあげ、向坂逸郎の『資本論入門』は無視する。『世界』5月号は「マルクス生誕200年、没後135年」で、新書の「資本論」関連文献購読のすすめにも向坂の『入門』はない。

向坂を徹底的に無視するのが、今の学者と言論界であるらしい。なぜか。向坂が史的唯物論、そして革命をマルクスの根本とするのが気に入らないのである。

小林晃氏がマルクスと向坂しか信用できなくなった、滝野さんはどうですかと、電話。07年の半ばだった。それから2く3ヶ月に一度のわりあいで寄稿し続けてくださった。昨年暮れに「夏から体調よくない、よくなったら書かせてよ」との連絡をいただいていたのだった。それから約6ヶ月、享年81歳であった。さいごの単行本が『現代と「資本論」』（時潮社、2015年）であり、晩年の論稿が本稿である。（滝野忠）

【小林晃先生の『社会通信』これまでの主な掲載論文】

No. 422（一九八九年二月一日）

消費税は阻止できる！（講演要旨）

No. 602（一九九五年四月二日）

驚異の600号

No. 1000（二〇〇七年五月一・二日）

みんなの知的財産

No. 1005（二〇〇七年八月一日）

◇巻頭言◇ 独占資本による協同搾取

国家と税制による搾取

No. 1038（二〇〇八年二月一五日）

◇巻頭言◇ 国際金融危機と世界同時不況

No. 1046（二〇〇九年四月一五日）

資本主義はどこへ？

No. 1055（二〇〇九年九月一日）

キューバへの期待

No. 1061（二〇〇九年二月一日）

鳩山「友愛」論 — 政権交代・雑感 —

No. 1069（二〇一〇年四月一日）

消費税増税いよいよ浮上

No. 1076（二〇一〇年七月一五日）

◇巻頭言◇ 「第三の道」批判

— 菅政権の欺瞞性 —

No. 1089（二〇一一年二月一日）

現今の階級情勢 — 反撃の条件 —

No. 1100（二〇一一年七月一五日）

新「福祉国家」論の階級性

No. 1134（二〇一二年二月一五日）

資本主義の矛盾と危機

— 象徴的なアメリカ大統領領選 —

No. 1145 (二〇一三年六月一日)

「機械が仕事を次々奪う」

―「ラッダイト」的機械観の蒸し返し―

No. 1150 (二〇一三年八月一日)

◇巻頭言◇

独占資本と国家独占資本主義

No. 1153 (二〇一三年一〇月一日)

独占資本と国家独占資本主義

No. 1155 (二〇一三年一月一日)

独占資本と国家独占資本主義

No. 1164 (二〇一四年三月一日)

「市場経済」(資本主義)批判は「誤解」か

―アベノミクスの正体―

No. 1168 (二〇一四年五月一日)

◇巻頭言◇ 国家独占資本主義と搾取

独占資本による搾取の構図

No. 1172 (二〇一四年七月一日)

現象形態と本質

―搾取(剰余価値)論の意味するもの―

No. 1179 (二〇一四年一月一日)

◇巻頭言◇ 独占資本と中小企業

―ある中小企業者の「実感」―

No. 1183 (二〇一五年一月一日)

『資本論』を、どう読むか

―経済学の方法と「宇野理論」―

No. 1186 (二〇一五年二月一日)

『資本論』を、どう読むか

―経済学の方法と「宇野理論」―

No. 1187 (二〇一五年三月一日)

『資本論』を、どう読むか

―経済学の方法と「宇野理論」―

No. 1189 (二〇一五年四月一日)

『21世紀の資本(論)』と『資本論』

No. 1206 (二〇一五年二月一日)

「労組の不作為の結果」?

―昨今の春闘―

No. 1212 (二〇一六年三月一日)

「アベノミクス通信簿」

No. 1217 (二〇一六年六月一日)

◇巻頭言◇ 『資本論』発刊一五〇年

No. 1230 (二〇一六年十二月一日)

◇巻頭言◇

現代も資本主義である、ことを忘れまい

―人工知能の資本主義的利用の帰結―

No. 1235 (二〇一七年三月一日)

◇巻頭言◇

「保護貿易」か「自由貿易」か

―現代も資本主義である、

ことを忘れまい

No. 1239 (二〇一七年五月一日)

「資本主義の未来」

―現代も資本主義である、

ことを忘れまい

No. 1243 (二〇一七年七月一日)

現代資本主義論の混迷

―現代も資本主義である、

ことを忘れまい

No. 1246 (二〇一七年八月一日)

AI(人工知能)と

BI(ベーシックインカム)

―現代も資本主義である、

ことを忘れまい

以上、小林晃先生の論文は、

ホームページで御覧になれます。

『社会通信』で検索し、バックナンバー欄で

<http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/>